

〔論 説〕

古代ギリシアにおける石材・石碑の行く末と再利用

師 尾 晶 子

はじめに

古い建造物や石碑などの再利用については、長い間、古代末期から中世におけるスポリアの研究に集約されてきた。スポリア *spolia* (単数形: *spolium*) とは spoils すなわち戦利品を意味するラテン語で、狭義においては、古代末期から中世の教会に再利用された古代建築・古代遺物の石材を示す言葉である。古代の建造物は、それを必要としなくなった時代の人々にとって、もっとも手近な建築部材であった。放置された建造物を破壊・略奪してそれを再利用したことから、そしてキリスト教徒が異教徒の建造物から部材を調達してそれを見えるような形で配置したことから、こうした部材がスポリアと称されるようになったわけである。この本来的な意味でのスポリアをめぐる研究、すなわちキリスト教の教会聖堂に古代神殿の石材が再利用されるということの意味をめぐることは、総論各論ともに膨大な研究史がある⁽¹⁾。

ところで、不要になった建造物やその他のものに使われていた資材を新たな建造物の基礎や装飾に再利用するということは、古代末期を待つまでもなく、より古い時代から繰り返しかえしおこなわれてきた。スポリアをめぐる研究史においては、しかしながら、4世紀初頭以降、意図的に公的建造物に古い建造物の資材の転用をおこなうという新しい建築文化が生まれたことが指摘されてきた。とりわけコンスタンティヌス帝の凱旋門の意匠が、かかる新しい建築手法の誕生の画期となったことが指摘されている。要するに公的建造物の建材に意図的にスポリアを用いる文化は、古代末期に生まれたものだと考えられてきた。

しかしながら、スポリアの概念からは外れるものの、放置された建造物の石材を意図的に用いるという行為は、紀元前5世紀初頭のアテナイにおいてすでに認められるものでもあった。後述するように、ペルシア戦争後のアテナイのアクロポリス北壁の再建と強化において、城壁の部材として、ペルシア軍によって破壊された神殿の石材が意図的に見えるように配置されたのである。新しいものを建造する際に、古いものからの転用材を意図的に用いることで過去の記憶を永続的に視覚化するという手法は、アクロポリス北壁のデザインに認められるのである。

本稿では、スポリア研究の中で、スポリアの概念に必ずしもあてはまらないことから研究対象にされてこなかった、古代ギリシア世界における石材の再利用、とくに石碑の再利用について整理し、今後考察を深めていくための素材を提示したいと思う。古代ギリシア世界における石材の再利用について総括した研究は、管見の限り存在しない。近年、奉納

(1) スポリアの概念については、必ずしも研究者の間で合意を見ているわけではない。スポリアに関する基本的な文献としては、さしあたり Kinney (1997); (2001); (2011); Esch (2011) を参照。また、膨大な研究史の概観については Frey (2006) 1-142 を参照。

像あるいは顕彰像の再利用とそのためにおこなわれた台座の再刻もしくは改竄についての論考がShear, Keesling, Krumeichらによってそれぞれ発表され、古典期に制作された像の後代における受容および古典期と後代（とりわけ第二ソフィスト運動の時代）との関係性について関心が向けられるようになった⁽²⁾。しかしながら、像以外のものの再利用のあり方については、いまだほとんど整理されていないのが実情である。それゆえ、本稿では、古代ギリシア世界における石材の再利用のあり方をまず整理したい。その際、再利用によって本来のコンテキストが失われる、あるいは改変されると同時に、オリジナルの存在がどのように再生されることにつながるのか、とりわけ個人ではなくそれが当該集団にとってどのような意味を持ち得たかについて考察したいと思う。

1. ペルシア戦争後の城壁の再建・強化と記憶のディスプレイ

前480年春、アテナイの町はクセルクセス率いるペルシア軍の蹂躪を受けた。蹂躪を前にアテナイ人は町を捨てることを決意し、婦女子はトロイゼンに、老人はサラミス島へと避難させ、成人男性は軍船に乗り込んでペルシア軍を待ち受けることにした。これにより、ペルシア軍が進軍してきたとき、アッティカおよびアテナイの町は完全に無防備な状態となった。ペルシア軍は各所に火を放ち、容赦なく破壊活動を展開した。アクロポリスも例外ではなく、城壁を登攀してきたペルシア兵によって全面的に火を放たれた⁽³⁾。前480年夏のサラミスの海戦に勝利したものの、アテナイ人は、翌春もペルシア軍の攻撃に備えてアッティカを去り、家財を安全なところに移すとともに自分たちはサラミス島に渡った。アテナイ人が和平に応じないことから、アッティカはふたたびペルシア軍に蹂躪され、町は焼かれ、地上に立っているものはことごとく破壊された⁽⁴⁾。

前479年6月のプラタイアの戦いでギリシア連合軍が勝利を収め、ペルシア軍がギリシア本土から撤退した後、アテナイに戻ってきた市民が目にしたのは、破壊され焼き尽くされた町であった。アテナイ人が町の復興にあたってまず取りかかったのは、市壁の再建と強化であった⁽⁵⁾。テミストクレスの主導によりおこなわれたこの市壁の再建と強化については、トゥキュディデスが次のように語っている。

アテナイ人はこのように短期間のうちに城壁を固めたのであって、この構築物が大急ぎで造られたことは、今日でも歴然としている。基礎の部分は雑多な種類の石材から成っており、場所によっては、石材に手を加えず、各人が運んで来たものを、そのまま用いており、また多数の墓標（πολλαὶ στήλαι ἀπὸ σημάτων）など別の用途に造形された石材も嵌め込まれている。市域を囲む城壁は到る所で拡張されたので、そのために何もかも無差別に手をつけて大急ぎで運んだのである。（『歴史』1.93.1-2 翻訳は、藤縄謙三訳『歴史1』京都大学学術出版社より引用）。

(2) Shear (2007) ; Keesling (2003) 185-192; (2010) ; Krumeich (2010) , esp. 368-385.

(3) Hdt. 8. 50-55 (アクロポリスの焼き討ちについては8.53) .

(4) Hdt. 9.13.

(5) Thuc. 1.89.3-93.

このとき建造された城壁の建材に使用された墓碑のいくつかが今日アテネ国立考古学博物館やケラメイコス博物館に展示されている。Kniggeによれば、「今日考古学博物館とケラメイコス博物館に収蔵されているほとんどすべての墓標は、前478年に造られたテミストクレスの城壁と城門に組みこまれた状態で発見された」ものであった⁽⁶⁾。墓碑の多くは前6世紀半ばころにつくられたものであるが、それから数十年ののちに城壁の建材として本来の役割を果たすことを停止したのである。墓碑のなかには、城壁の石として積み上げるべく直方体に近い形にするために、レリーフの表面を削り取られたものもあった⁽⁷⁾。

しかしながら、ペルシア戦争後、これ以上に意図的に石材の再利用がおこなわれたのは、アクロポリスの北壁の再建工事であった。テミストクレス、あるいは前460年代にキモンの主導によって、アクロポリスの北壁の再建と強化のための工事がおこなわれた⁽⁸⁾。この城壁の壁材には、一部アテナ古神殿と古パルテノン神殿の建材が再利用された。アテナ古神殿は前510年～前500年ころにかけて建造されたもので、一方、古パルテノン神殿は、おそらくはマラトンの戦いの勝利を祝して前488年ころに建築がはじまったものの、ペルシア軍の来寇のために工事が中断された未完の神殿であった。いずれの神殿も、ペルシア軍によって破壊され、火を放たれ、一時的に放置された状態になっていた⁽⁹⁾。北壁の再建強化工事にあたって、両神殿の建築部材が目立つように城壁の上部に配置されたのである。神殿のエンタブラチュア（アーキトレーヴ・ドーリス式フリーズ〔トリグリュフォス・メトープ〕・ゲイソン）や柱の円筒石が北壁の上部に積み重ねられている様子は、今日なおはっきりと目で見ることができる（図1、図2、図3を参照）。エンタブラチュアは、アテナ古神殿（前510～480年ころ）に由来し、加工途中の柱の円筒石は古パルテノン神殿のために切り出されたものであった。前者はエレクトイオンの西側に、後者は東側に配置された。損傷を受けた神殿の部材が嵌め込まれたこの城壁は、市民生活の中心たるアゴラから見渡せるように設計されており、明確に見られることを、記憶にとどまることを意図して配置されたものであった⁽¹⁰⁾。

(6) Knigge (1991) 30-34.引用は30頁。

(7) テミストクレスの城壁の全容については、Noack (1907) を参照。また、墓標の実例については、Richter (1961) p.12-13, No. 7 (c.610-575 BCE, Kerameikos Museum); p.15-16, No. 11 (c.575-545 BCE, Kerameikos Museum); p.22, No. 27 (c.560 BCE, NM 2687); p.23, No. 29 (c.575-545 BCE, NM 2825); p.23-24, No. 31 (c.560-550 BCE, Kerameikos Museum); p.33-34, No. 47 (c.550-525 BCE, NM) を参照。

(8) アクロポリス北壁の再建強化については、かつてはテミストクレスによる事業とされることが多かった。しかしながら、Boersma (1970) は、北壁と南壁の工法の類似点から、南壁同様、北壁の再建もキモンの主導のもとにおこなわれたと推測する。そしてエウリュメドンの戦いの戦利品が城壁再建の資金源となったと解釈している。南壁の再建・強化についてはPlut. *Cim.* 13. 6, Nepos *Cim.* 2. 5に記載があるものの、北壁の再建がいつ、誰の主導のものにおこなわれたかについては、古代の著作家による言及はない。Hurwit (1999) 143 with n. 19, Holtzmann (2003) 93-95 も Boersma (1970) 46 の見解にしたがっている。一方、Korres (2002) はテミストクレス説を唱え、Krumeich/Witschel (2010) 7 with n. 31 はそれを支持している。

(9) 古パルテノン神殿の石灰岩の基壇が、前447年に建築のはじまったパルテノン神殿の基壇として見えるように使われていることについてはよく指摘されているとおりである。これもまた、古い時代の記憶を目に見える形でこすという手法の1つだと言える。アテナイの中心聖域としてのアクロポリス全体にこのような手法がみられること、なかでもミュケナイ時代の城塞が見える形でアテナ・ニケ神殿の護壁の北面やアクロポリス東部にのこされていることについては、Hurwit (1999), Holtzmann (2003), Papadopoulos (2012) 341-342 を参照。

(10) ヘカトンパドン神殿の建築部材もまた南壁および東南壁の部材として埋め込まれた。ディオニュソス劇場の



図1 アクロポリス北壁（筆者撮影）

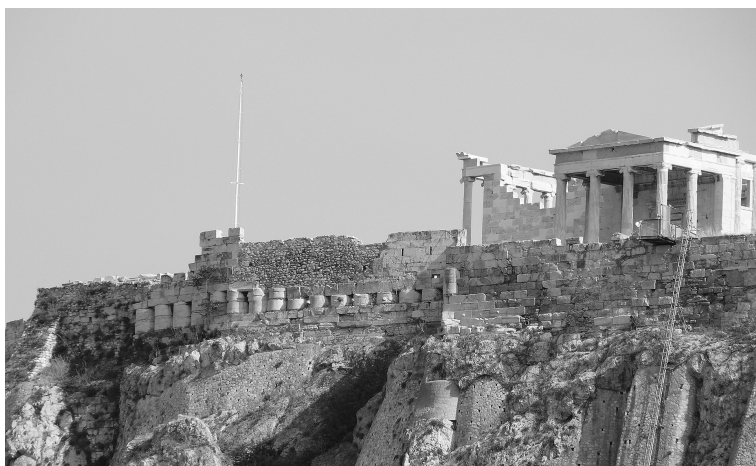


図2 アクロポリス北壁東側部分。再利用された柱の部材が並べられているのが見える（筆者撮影）。

サラミスの海戦の戦利品でつくられたといわれるアテナ・プロマコス像に見られるように、ペルシア戦争後、戦利品を溶かして神像にして奉納するということは各地でおこなわれたが（そしてその行為自体は広義においては再利用と言えようが）、建築部材をそのままそれとわかる形で再利用したという事例である点で、アクロポリスの北壁は注目される。古代の史料は何も語らないが、このような建築部材が再利用されたのは、単に手近な資材であったことはもちろんだが、同時にペルシア軍がおこなった「蛮行」を永続的に視覚化し、ペルシア戦争の記憶を永続化するという効果を持ち得たと言えよう。

上部に埋め込まれたこれらの部材は北壁ほど明確ではないものの、確かに見ることができる（図4参照）。Cf. Goette (2001) 12.



図3 アクロポリス北壁西側部分。アーキトレーヴが城壁の上部に配置されているのが見える。とりわけドーリス式フリーズの部分が目立っている（筆者撮影）。



図4 アクロポリス南壁東側部分。上部にメトープなどが嵌め込まれている様子が明確ではないものの視認できる（筆者撮影）。

2. 石碑・像の寿命と再利用

上述のように、アルカイック期に建立された墓碑の多くがテミストクレスの主導のもとに建造された市壁の部材として使われることとなった。その寿命は、短いものでは数十年にも満たなかったであろう。同様に、後267年のヘルリ人の侵入の後、後282年頃に構築されたとされるアテナイの城壁の部材の大部分は、ヘルリ人によって破壊された周辺の建造物や石碑、彫像の台座からなっていた。ここでも比較的新しく建立された石碑や像が部材

として用いられていたことが知られている⁽¹¹⁾。

また、前5世紀半ばにはじまったペリクレスによるアクロポリス再建事業においては、アクロポリスに建立されていた多くの奉納物が取り除かれ、埋められることになった。いわゆる Perserschutt とよばれる埋蔵穴からは、ペルシア戦争時に破壊されたり、火を放たれ焦げ付いた像だけではなく、ペルシア戦争後に新たに奉納された像も数多く含まれていたことが Stewart によって明らかにされている。新しいものでは、前430年代に制作されたと思われる像も含まれており、北壁、南壁の工事、さらにはアクロポリス上部の再建事業のために、放置されていた建材のみならず、奉納設置されていた種々の像も工事に不要なものとして取り払われ、埋蔵穴に廃棄されたのである。奉納像としての役割を果たしていた期間は、ものによっては20、30年にも満たなかったことになる⁽¹²⁾。

2-1. 再利用石材に刻まれた碑文

石碑の素材として再利用品が意図的に使われることもあった。いわゆる「ヘカトンペドン碑文」(IG I³ 4, 前485/4年)の石板は、ヘカトンペドンと呼ばれる古い神殿のメトープ2枚を再利用したものであった⁽¹³⁾。「青ひげの神殿」(Bluebeard Temple)とも称されるヘカトンペドン神殿は、前6世紀第2四半世紀、おそらく前565～560年ころ、ペイシストラトスの提唱によって、大部分石灰岩を用いてつくられた神殿である。前490年、マラトンの戦いの後、古パルテノン神殿の新築に際して、オイケマタ (oikemata; 部屋、家の意) とよばれるおそらく聖財の保管されていた建物をのぞいて取り壊された⁽¹⁴⁾。「ヘカトンペドン碑文」はアテナ・ポリアスのための宗教儀礼に関わる取り決めが刻まれた碑文であるが、素材がヘカトンペドンのメトープと同様にヒュメトス山の採石場から切り出された大理石が使われていること、もともとメトープに施されていた浮き彫り模様が平らな碑面をつくるために削り取られた痕が碑文の下部にうっすらと残されていることから、この神殿の石材が再利用されたものであることが明らかになっている⁽¹⁵⁾。なお、この神殿の建材は、上述のアクロポリス北壁や「ヘカトンペドン碑文」にとどまらず、前437年から432年にかけて建設工事がおこなわれたプロピュライアの床材にも一部使われていたことが確認されている⁽¹⁶⁾。

破壊、もしくは未完で放棄された神殿の建材を石碑の石材として再利用するという手法は、第1頁租初穂表 (*Lapis Primus*) でも用いられたという説が近年提唱された。2011年に

(11) Thompson and Wycherley (1972) 209.

(12) いわゆる Perserschutt とその穴が使われた年代については、Stewart (2008) を参照。Stewart は、この埋葬穴がペルシア軍の掠奪行為によって破壊された像などのゴミ捨て場として使われたのみならず、ペルシア戦争後にアクロポリスに設置されたものの、その後不要になったり邪魔になったために廃棄が決まったものの投棄場所としてつかわれていたことを明らかにした。

(13) 碑文の決議年代は、メトープAの14行目、メトープBの26行目にあらわれるアルコン名からわかる。Butz (2010) はこのアルコンが前485/4年のフィロクラテスであることを確定した(141-143)。

(14) ヘカトンペドン神殿の建造時期については、Hurwit (1999) 114 参照。オイケマタについては、ヘカトンペドン碑文に「ヘカトンペドン神殿の中のオイケマタ」という言及があることから、残存していたことがわかる。

(15) 加工の痕は、アテネ碑文博物館に展示されているメトープBにはっきりと残されている。もともと施されていた浮き彫り装飾が削り取られている様子についてはButz (2010) xiii の Plate 3 および4の写真がわかりやすい。

(16) Butz (1999) 参照。

『ヘスペリア』誌上に発表した論文において、Miles は、独立した石碑として建立されたものとしてはギリシア碑文最大の大きさを誇る第1貢租初穂表の石材が、もともと古パルテノン神殿のアーキトレーヴのために切り出され、アクロポリスに運ばれてきた石材の再利用であるという説を提示した⁽¹⁷⁾。上述のように、マラトンの戦いの戦勝記念として建立がはじまったとされる古パルテノン神殿は、基壇がつくられ柱を設置しようというところでペルシア軍の襲撃に遭い、そのまま放置されることとなった。すでに神殿建築のために切り出され、アクロポリスに運ばれてきていた石材が、貢租初穂表に転用されたというわけである⁽¹⁸⁾。Miles は同論文で、前439/8年から前432/1年まで8年間にわたる貢租の初穂額が刻まれた第2貢租初穂表 (*Lapis Secundus*) もまた、その石碑の特異な大きさから、碑石として切り出されたものではなく、もともと建材として切り出されたものである可能性が高いと論じた。そして、この石材は、パルテノン神殿の建造のために切り出された石材の転用ではないかと推測している⁽¹⁹⁾。女神アテナの神殿のために用意された石材を女神に捧げる初穂の金額を刻む石碑に転用し、それを改めて奉納するという行為の中に、再利用という行為の儀礼性を認めることができる。

2-2. 墓碑, 墓標の再利用

緊急時に城壁の部材として再利用された墓碑については上述したとおりであるが、墓碑そのものとして再利用されることもまためずらしくなかった。この場合、公的なものというよりも、私的な墓碑が、その後私的に再利用されるということになる。このような墓碑の再利用がいつからはじまったのかについては明らかでない。またほとんど体系的な研究もなされてきていないように思われる⁽²⁰⁾。しかしながら、一度建立された墓碑に名前が書き加えられて二次利用されたり、デザインに変更が加えられて二次利用されるという事例は、古典期のうちから、おそらく前5世紀末から前4世紀はじめころから知られている⁽²¹⁾。そして、ヘレニズム時代以降、再利用の事例が目立つようになったことはまちがいないと思われる⁽²²⁾。一族の名が書き加えられるばかりでなく、全く関係のない人物の名が古い墓碑に書き加えられることは珍しいことではなかった。また元の被葬者の名前が削られて、新たな被葬者の名前が刻まれることもあった。

そもそも、墓そのものが再利用されることはめずらしくなく、また特定の人物のためにつくられた墓が墓として利用されていたのは、一般にせいぜい3世代程度であったという

(17) Miles (2011) 参照。

(18) 古パルテノン神殿の基壇自体、前447年に工事のはじまったパルテノン神殿の建築のために再利用され、また切り出されアクロポリスに運び上げられていた石材の一部は、パルテノン神殿の基壇や床材に再利用された。

(19) Miles (2011) 667-669.

(20) Oliver (2000) 6.

(21) *SEG* 51. 248. 主としてペイライエウスとサラミスから出土した浮き彫りおよび碑文に変更が加えられ再利用された事例をあつめた M.I. Pologiorgi, *AD* 54 (1999) A [2003] 173-214 の内容が紹介されている。Pologiorgi の論文については筆者未見。より一般的には Kurtz and Boardman (1971) 136 参照。

(22) ヘレニズム、ローマ時代の小アジア出土の墓碑に頻出する、他者の墓に勝手に埋葬することに対して警告し、違反者に罰金を求めることを記した墓碑の存在は、逆に言えば、このような墓の二次利用、墓碑の二次利用が珍しいものではなかったことを示している。ただし、こうした警句が刻まれた墓碑は、小アジアからの出土に限定されており、とくにリュディア、フリュギア、リキアからの出土が多い。Strubbe (1991); (1997) 参照。

研究もある⁽²³⁾。小アジアにおいて、墓荒らしに対する警句を含んだ墓碑が頻出するが、その多くは一族の墓地に他者が埋葬されることに対する警告であった。

2-3. 顕彰像・奉納像の再利用

近年、顕彰像の再利用（すなわち使い回し）について注目されている。アテナイにおいてはじめて顕彰像が建立されたのは「僭主殺し」ハルモディオスとアリストゲイトンで、前6世紀末のことであった。アンテノルによってつくられた彼らのブロンズ像は、前480年のペルシア軍来寇の際、スサに持ち去られ、アレクサンドロスかあるいは後継者によって持ち帰られるまでそこにとどまった⁽²⁴⁾。「僭主殺し」の像は、前487年ごろにクリティオスとネシオテスによって再度つくられてアゴラに建立されることとなった。「僭主殺し」の像が建立されてから1世紀近くの間、同様の顕彰像が建立されることはなかったが、前4世紀初頭、コノンがその軍功ゆえにブロンズ像を持って顕彰されると、その後、数こそ限定的ではあるものの、ポリスに対して最大限の功績を挙げたと認められた者に対して顕彰像の建立が褒賞として与えられるようになった⁽²⁵⁾。

かかる顕彰像の多くはアゴラに建立されてきたが、ローマ時代に入って、アテナイ人によって顕彰されたローマ人の顕彰像がアゴラばかりではなくアクロポリスに建立されるようになった。この一部は、新規に像をつくるのではなく、既存の像とその台座を再利用し、被顕彰者の名前をそこに刻むという形で実現された。こうしたブロンズ像はすべてオリジナルの奉納像が再利用された⁽²⁶⁾。台座については、オリジナルの台座の碑銘の一部を削って新たに被顕彰者の名前を刻んだものもあれば、オリジナルの碑面の裏側に新たに碑銘を刻んだものもあった。第三者による奉納像が、時代を経て顕彰像としてあらためて奉納されたわけである。こうした奉納像を再利用した顕彰像は、アッティカ内外の他の聖域でも見られるが、オロポスのアンフィライオンに建立された像のほとんどはローマ時代に再利用され、碑銘が書き加えられた⁽²⁷⁾。ローマのエリートにとって、新たな像をつくることに経済的な問題はなかったはずで、古いものを再利用することに意味があったのである。実際、本来の奉納者の名前が削られた場合にも、像の制作者の署名は残されるのが通例であった。

アテナイのアクロポリスにおける奉納像の再利用をのぞくと、最近までの碑文集における出土地と出土状況についての記載の不備もあり、ほとんど研究が進んでいないのが実態であるが、ギリシア文化の中心地としての地位を認められたアテナイ以外の地において同

(23) Humphreys (1980) 114-121 参照。

(24) Paus. 1. 8. 5; Arrian, *Anabasis* 3. 16. 7-8; Plin. *NH* 34. 70.

(25) 「最高の榮譽 *megistai timai*」によってアゴラに建立されたブロンズ製の顕彰像については、Aristeides 53. 23 の記述を参照。また「僭主殺し」の像に次いでアゴラに建立された像がコノンの像であったことについては、Dem. 20. 70 を参照。コノンの像の建立がアテナイにおける顕彰像を建立するという習慣の確立に与えた影響については、周藤 (2013) を参照。顕彰像の建立の社会的コンテキストについては、Ma (2013) を参照。とくに当初の建立意義を失った彫像の再利用については、55-62, esp. 61-62 を参照。

(26) Shear (2007); Keesling (2003) 185-192; (2010); Krumeich (2010) esp. 368-385. Krumeich のカタログによれば、オリジナルの碑銘に手を加えられたものが11例、手の加えられていないものが9例である。なお、IG の番号とアクロポリス美術館の所蔵番号との同定については、Matthaiou and Malouchou (2012) を参照。

(27) Keesling (2010) 321.

様の状況が見られるのかどうか、あるいはアテナイに特有の現象なのかについての調査は今後の課題だろう。

2.4. 石碑の再利用

石碑の石碑としての再利用については、古典期まではあまり知られていない。個人の体験にもとづいて言うならば、遺跡に放置されている石碑を見る限り、ヘレニズム時代以降はめずらしいことではなかったようである。しかしながら、石碑の二次利用についてのまとまった研究が存在するのかどうかについては、管見の限り知らない。実際にさまざまな遺跡現場で目にした碑文にもとづけば、裏側など未使用面に新たな碑文が刻まれることがあった一方、古い碑文を削ることなく、そのまま上書きされたものも存在する。このことを考えれば、不要となった無数の碑文の表面が薄く削られて、再利用された可能性はきわめて高いと言えるかもしれない。とりわけ浅く細かな文字で刻まれたヘレニズム時代の決議碑文は再利用に適した素材であったと言えるかもしれない。しかしながら、オリジナルの碑文と、二次利用によって刻まれた碑文との間に意図が見てとれるものは、上述の奉納像あるいは顕彰像の台座以外にはほとんど存在しないように見える⁽²⁸⁾。

一方、古典期アテナイにおける石碑の石碑としての再利用についての反証となる事例としては、アテナ・パルテノス像の制作に関する会計記録がある。前447/6年から前438/7年まで1年ごとに出納が記録され建立された。このうち、前440/39年の出納記録は2枚見つかっており、1枚は途中まで刻文して放棄され、おそらくアクロポリスに埋められた⁽²⁹⁾。レイアウトのミスないし気変わりによって廃棄されたこの石碑は、再利用されることはなかった⁽³⁰⁾。これが特殊な事例なのか、それとも頻繁にあることであったのかについては、現存の史料からは判明しない。

3. 碑文の寿命

いったん建立された碑文の寿命はどれほどであったのか。古代ギリシア人が石碑の建立に永続性を認めていたことは、文献史料の中でもたびたび語られている⁽³¹⁾。実際、碑文の条文の改竄や破壊を禁ずる一文の含まれた碑文も数多く知られている⁽³²⁾。たとえば、前500年ころに締結されたエリスとヘライアとの条約においては、「もしも何人か刻まれたもの(=この碑文)に損傷を加えるならば、私人であれ役職者であれ国家(ダーモス)であれ、その者はここに書かれているように聖なる罰金を負うこと」と規定され⁽³³⁾、いわゆる「テオスの呪い」においては、「もしも何人か呪いが書かれているこの石碑を運び出し、破壊した

(28) 一例を挙げれば、前295/4年の顕彰碑文の側面に後1世紀半ばころの字体で名前とタイトルの示された *IG* II² 646 = *IG* II³ 1 853 と *IG* II² 2305。

(29) *IG* I³ 459 = ML 54 A (1)。

(30) Austin (1934) 62-63 は、*IG* I³ 459 がストイケドンスタイルで刻文されていないことから廃棄されたと推測する。一方、Austin の著書の書評をおこなった Meritt (1939) は、左側に金額を刻むスペースを入れ忘れたことから廃棄されたと推測している (384)。

(31) *E.g.* Dem. 20. 127; [Dem.] 58. 56.

(32) 下記の註 33, 34 の事例以外に、ML 13, 14-16 (c.525-500BCE) など。

(33) ML 17 = Buck 62, 7-10 (c.500 BCE)。

り、文字を切りつけたり、読めなくしたならば、その者は破滅すべし。彼も彼の一族も」という呪いの一節が刻まれた⁽³⁴⁾。

逆に、碑文に刻まれた内容に変更が生じた場合、碑文の該当箇所が削られ、修正された例もまた知られている。オイニアデス顕彰碑文においては、「スキアトス人オイニアデス」という表現は、追加動議によって本人の希望した「パライスキアトス（古スキアトス）人オイニアデス」と書き換えられることが決定され、それに基づいて碑が刻まれた⁽³⁵⁾。ネアポリス人顕彰碑文では、前410/9年の決議によってすでに刻まれていたフレーズが、前407/6年ころの再決議において、「タソスの植民市である」という7行目と8行目の句を削り、代わりに「アテナイ人とともに敵に対して戦い続けたこと」と刻み直すことが決定された（58～59行目）。母市たるタソスがアテナイからの反乱に屈したことで、タソスとの親密な関係を明確に示す言葉を消し去ることを望んだのであった⁽³⁶⁾。さらに、第二次海上同盟の設立憲章を刻んだ碑文においては、「アテナイ人と同盟を締結した諸市のいずれかに、アテナイに不都合な石碑が存在した場合には、その時々の評議員はそれらを破壊する権限を有すること」が規定された⁽³⁷⁾。また、アテナイとテッサリア人との同盟締結にあつては、これによってこれまでの同盟を記載した石碑の破壊が命じられた⁽³⁸⁾。こうした事例は、石碑というものが物理的なモノであること、それゆえにその内容に齟齬が生じた場合に、物理的な破壊や変更が加えられることを必然としたということを示している。

それゆえ、前5世紀末、アテナイの「30人僭主」は、民主政下のアテナイで顕彰された人々のために建立された顕彰碑文を破壊した。復活民主政下で再刻された碑文が実際に存在することから、この行為が現実におこなわれたことが知られている⁽³⁹⁾。また、前200年、アテナイはアンティゴノス朝の名が刻まれた石碑から、その名を削り取ることを決定した。いわゆる「記憶の断罪」(*damnatio memoriae*)である⁽⁴⁰⁾。

その一方、50年、100年といった有期の条約が締結されたとき、その条約の効力が失われた後も、多くの場合、無効になった碑文が破壊されることなく存在しつづけたと考えられることがBolmarcichによって指摘されている。彼女によれば、アテナイの外交碑文に関して言うならば、アクロポリスに建立された石碑のほとんどがその役割を終えた後もそのまま放置されていた。必ずしも積極的に保護されていたわけではないにせよ、何らかの理由でそれらが邪魔にならない限り、あえて不要だという理由で処分されることがなかったというわけである⁽⁴¹⁾。

こうした状況からは、石碑の石碑としての再利用について、それほど積極的におこなわれていなかった様子が見えてくる。とりわけアテナイのアクロポリスのようにかなりの数

(34) ML 30, 35-41 (c.470-450 BCE) .

(35) *IG* I³ 110, 7-8 (408/7 BCE) . 追加動議は26～31行目。刻文前に決定されたため、この碑文自体には修正はない。

(36) *IG* I³ 101, 7 and 8 (410/9 and 407/6 BCE?) .

(37) *IG* II² 43, 31-35 = RO 22 (378/7 BCE) .

(38) *IG* II² 116, 39-40 = RO 44 (361/0 BCE) .

(39) *IG* I³ 229, II² 6, 13, 52, 66, *Agora* 16. 37.

(40) Byrne (2010) 参照。162～165頁に名前の削り取りがおこなわれた碑文の一覧が掲載されている。Livy 31.44.4-5も参照。

(41) Bolmarcich (2007) .

の石碑が設置されていたような場においては、一度設置したものに対して、内容をチェックし整理するなどという手間をかけるということの方が煩雑であり、非常時の対応であったとも言えよう。上述のアンティゴノス朝の「記憶の断罪」の行為においてすら、アクロポリスの上に設置された石碑については放置されたものが多かったことが指摘されている⁽⁴²⁾。建築資材や奉納像・顕彰像の再利用と石碑の再利用とのあり方については、大きな差異があるといわざるを得ない。

むすびにかえて

石材および奉納像およびその台座の再利用のなかには、それが単なる経済的な理由だけでおこなわれたというよりも、オリジナルが制作された時代や制作者と再利用者との結びつき、あるいは過去の記憶の保持・共有・再強化が意図されていたものがあることについては上述してきたとおりである。

一方、碑文の再利用という観点からながめたとき、上記の台座の意図的な再利用をのぞいては、破壊や削除によって記憶から物理的に遠ざけるという行為がしばしばおこなわれたのに対して、再利用によって記憶にとどめるということは、さほど積極的におこなわれてきたようには見えない。石碑の破壊についての警告、石碑の破壊の命令が存在する一方で、多くの石碑がその役割を終えてからも放置されていることは、そもそも石碑というものはいったん設置された後は手を加えないということがその本質であることを示しているようにも見える⁽⁴³⁾。このことは、石碑のもつ性格について、ひいては碑文の持つ意味について、今一度見直す視点を与えてくれているようにも見える。この点についての考察は今後の課題とし、石材と石碑の再利用に関する概観をひとまず終えたい。

付記

本稿は、平成24年度千葉商科大学学術研究助成「古代地中海世界における石碑の再利用に関する通時的研究」にもとづく成果の一部である。

文献略記

Agora 16 = Woodhead, A. G. *Inscriptions: The Decrees* (The Athenian Agora 16). Princeton. 1997.
Buck = Buck, C. D. *The Greek Dialects*. Chicago. 1955.

(42) Byrne (2010) 175-176.

(43) ここで再考を必要とするのが、「アテナイとレギオン条約決議」(IG I³ 53)と「アテナイとレオンティオイ条約決議」(IG I³ 54)である。いずれも碑文の上部が薄く削り取られて再刻されたこれらの碑文は、一般に前450年ころに成立した最初の条約を刻んだ石碑に、前433/2年に更新された条約を再刻したものと考えられている。この従来の解釈が成り立つのか、それとも Mattingly (1996) 266-268の主張するように前433/2年に初めて締結された条約であって、再刻は単なる決議年代の記載の仕方の変更によるものと考えられるべきなのか、今一度検討すべきだと思う。これについては別稿にゆずりたい。

IG = *Inscriptiones Graecae*. Berlin.

ML = Meiggs, R. and D. Lewis. *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.* Oxford. 1988².

RO = Rhodes, P.J. and R. Osborne. *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*. Oxford. 2003.

SEG = *Supplementum Epigraphicum Graecum*. Leiden.

参考文献

Austin, R. P. 1938. *The Stoichedon Style in Greek Inscriptions*. Oxford.

Boersma, J.S. 1970. *Athenian Building Policy from 561/0 to 405/4 B.C.* Groningen.

Bolmarcich, S. 2007. 'Afterlife of a Treaty.' *CQ*57: 477-489.

Brilliant, R. and D. Kinney. 2011. *Reuse Value. Spolia and Appropriation in Art and Architecture from Constantine to Sherrie Levine*. Farnham.

Byrne, S. G. 2010. 'The Athenian Damnatio Memoriae of the Antigonids in 200 B.C.' In: Tamis, A., C. J. Mackie and S. G. Byrne eds. *ΦΙΛΑΘΗΝΑΙΟΣ: Studies in Honour of Michael J. Osborne*. Athens.157-177.

Butz, P.A. 2010. *The Art of the Hekatompedon Inscription and the Birth of the Stoikhedon Style*. Leiden.

Butz, P.A., Y. Maniatis, and K. Polikreti. 1999. 'The "Hekatompedon Inscription" and the Marble of Its Metopes. Part II: The Scientific Evidence.' in: M. Schvoerer ed. *Archéomatériaux Marbres et autres roches. Actes de la IV^e conférence internationale (ASMOSIA IV)* 255-260.

Esch, A. 2011. 'On the Reuse of Antiquity: The Perspectives of the Archaeologist and of the Historian.' in: Brilliant/ Kinney eds. 13-31.

Frey, J. M. 2006. *Speaking through Spolia: The Language of Architectural Reuse in the Fortifications of Late Roman Greece*. diss. University of California, Berkeley.

Goette, H.R. 2001. *Athens, Attica and the Megarid. An Archaeological Guide*. London.

Holtzmann, B. 2003. *L'Acropole d'Athènes. Monuments, cultes et histoire du sanctuaire d'Athènes Polias*. Paris.

Humphreys, S.C. 1980. 'Family Tombs and Tomb Cult in Ancient Athens: Tradition or Traditionalism?' *JHS* 100: 96-126.

Hurwit, J.M. 1999. *The Athenian Acropolis*. Cambridge.

Keesling, C.M. 2003. *The Votive Statues of the Athenian Acropolis*. Cambridge.

Keesling, C.M. 2010. 'The Hellenistic and Roman Afterlives of Dedications on the Athenian Akropolis.' in: Krumeich/ Witschel eds. 303-327.

Kinney, D. 1997. 'Spolia. Damnatio and Renovatio Memoriae.' *Memoirs of the American Academy in Rome* 42: 117-148.

Kinney, D. 2001. 'Roman Architectural Spolia.' *Proceedings of the American Philosophical Society* 145: 143.

- Kinney, D. 2011. 'Introduction.' in: Brilliant / Kinney eds. 1-11.
- Knigge, U. 1991. *The Athenian Kerameikos: History -Monuments -Excavations*. Athens.
- Korres, M. 2002. On the North Acropolis Wall. in: Stamatopoulou, M. and M. Yeroulanou eds. *Excavating Classical Culture. Recent Archaeological Discoveries in Greece*. Oxford. 179-186.
- Krumeich, R. and C. Witschel eds. 2010. *Die Akropolis von Athen im Hellenismus und in der römischen Kaiserzeit*. Wiesbaden.
- Kurtz, D.C. and J. Boardman. 1971. *Greek Burial Customs*. London.
- Ma, J. 2013. *Statues and Cities. honorific Portraits and Civic identity in the Hellenistic World*. Oxford.
- Matthaiou, A.P. and G.E. Malouchou. 2012. *Συνοπτικός κατάλογος τῶν ἐπιγραφῶν Ἀκροπόλεως*. Athens.
- Mattingly, H.B. 1996. *The Athenian Empire Restored*. Michigan.
- Meritt, B.D. 1939. 'Review of R.P. Austin, *The Stoichedon Style in Greek Inscriptions*.' *CP* 34: 383-385.
- Miles, M.M. 2011. 'The Lapis Primus and the Older Parthenon.' *Hesperia* 80: 657-675.
- Newby, Z. and R. Leader-Newby eds. 2007. *Art and Inscriptions in the Ancient World*. Cambridge.
- Noack, F. 1907. 'Die Mauern Athens. Ausgrabungen und Untersuchungen.' *AM* 32: 123-160, 473-566.
- Oliver, G.J. 2000. *The Epigraphy of Death. Studies in the History and Society of Greece and Rome*. Liverpool.
- Papadopoulos, J.K. 2012. 'Framing Victory: Salamis, the Athenian Acropolis, and the Agora.' *Journal of the Society of Architectural Historians* 71: 332-361.
- Richter, G.M.A. 1961. *The Archaic Gravestones of Attica*. London.
- Shear, J.L. 2007. 'Reusing Statues, Rewriting Inscriptions and Bestowing Honour in Roman Athens.' in: Newby/ Leader-Newby eds., *Art and Inscriptions in the Ancient World*. Cambridge. 221-246.
- Strubbe, J.H.M. 1991. "Cursed Be He That Moves My Bones." in: Faraone, C.A. and D. Obbink eds. *Magika Hiera. Ancient Greek Magic & Religion*. Oxford 33-59.
- Strubbe, J.H.M. 1997. *ARAI EPITYMBOI. Imprecations against Desecrators of the Grave in the Greek Epitaphs of Asia Minor*. Bonn.
- Thomson, H. A. and R. E. Wycherley 1972. *The Agora of Athens: The History, Shape and Uses of an Ancient City Center (The Athenian Agora 14)*. Princeton.
- 周藤芳幸 2013.「コノンの像—古典期アテネにおける彫像慣習の一考察」『西洋古典学研究』61: 36 - 47.

(2016.2.1 受稿, 2016.2.25 受理)

〔抄 録〕

本論文では、古代ギリシアにおける石材と石碑の再利用のありかたについて概観した。一般に石材や奉納像・顕彰像の再利用がおこなわれるときには、再利用に対する強い意図が見てとれるのに対して、石碑を石碑として再利用する際には、それほどの意図がみとめられないことを確認した。石碑の破壊についての警告、石碑の破壊の命令が存在する一方で、多くの石碑がその役割を終えてからも放置されていることは、石碑というものはいったん設置された後は手を加えないということがその本質である、ということを示しているように思われる。